

ようと思い福島県上川崎村という所に落着きました。

しかしこんな村では働く場所がなく憂慮、二本松、福島市と、職を求めて走り廻りましたが、容易に職等ある筈がなく、足を棒にして二本松から歩いて村まで約八キロ、そんな日が何日か続いているときに、戦争中東京から疎開をしていた隣りのSさんという人から闇米の運搬の話申し込まれて乗り気になり、危険を犯して東京の新宿の飲食店へ売り込み、一寸した好景気に気をよくしましたが、あるとき一斉取り締まりを受けて現物を列車に残して難を逃れましたが、それを機会にSさんに話をしてその後闇販売をやめ、本籍地へ照会してあった父の転居先が判り行ってみたが、父は既にこの世の人ではなく二年が経過していたわけです。

父の生きていることを信じ当時として容易に手にはいかなかった日本酒と煙草を持参したのでした。父も自分の引揚げを心から願ひ再会ののちにその地で商売を再開出来るように駅のすぐ近くに家を建て土地も約三百坪求めてあったようです。父も自分も戦争によって生きる道まで変えられたことに終生憤りを禁じ得ないでしょう。

勿論自分だけではありません。数多くの善良な国民を不幸のどん底に落とし入れた。自分等の当時の体験によって二度と戦争という渦の中に巻き込まれない時代になることを念願し真の世界平和を目指す指導者を見出し出して次の世に貢献して欲しいと念ずるものであり、現在こうして労苦を書く事を得て思いもまた更に新しく浮上して来ます。親しき同年兵や、先輩同志の方が次から次とこの世を去って行くのを見て、やがて自分にも人生最後の幕が引かれるであろうが、自分の過去の一端が現代と次の代に必要な平和の土台になっていたのではなからうかと、自己満足をして心を慰めている現在です。

私の一生を変えた戦争

北海道 斉藤 タカ

私の父は栃木県の出身でした。日露戦争が終わって樺太が日本のものになってからすぐ樺太に渡ったのだそうです。そこで私が関口家の一人娘として育ちました。母

が弱かったので栃木県から父の両親をよびました。私が六歳のときに母は亡くなりそれからずっと四人暮らしでした。

父があまり体が丈夫ではなかったので私は常に心の中では不安でした。私も小学校と今の中学校一年にはいった一月二十三日に父は亡くなりました。仕事は漁業をしていましたが父が弱かったのでもいつも貧乏でした。父が一月二十三日に亡くなってからすぐ二月二日には祖父も亡くなり十日ほどで父子で亡くなり私と祖母と二人になり淋しい毎日でした。その頃から私の心の中にはいつも前向きでこの先どうなるかとそればかり心の中で思うようになりました。

父と友達であった人には子供がたくさんおりましたので、父は良く友達に一人私の養子にと話しかけておりましたので、私は十七才で其の人と結婚しました。其の人は十八才でした。子供の頃から良く働く人でしたので、父は体が弱かったので其の人をえらんだのだと思います。

父のあとをつぎ鯨や昆布を取って生活していました。

その内広地という所に漁業協同組合が出来まして各部落が広地村漁業協同組合になって、其の頃は鯨と昆布で一年の生活が出来たものでした。私は十八才で長男を生ましました。その長男を一年ほどもりしてくれた祖母も亡くなりまして私達だけの生活をしている内に年月も立ち四人の子供の親になっていました。

其の内にいろんな戦争が始まりました。なぜか兄弟中で一番体の丈夫な夫が病気になるなり又私の不安が心の中でもち上がりました。夫の病氣は左手首の関節炎でした。仕事をするにも右の手の方ばかり使い始めるようになり、鯨場のときは北海道から人を頼んで自分が一緒に船に乗って網を刺しに行ったりしていました。その内に背の中の方もいたいといいだして病院に行った所、セキズイカリエスとのことで私もびっくりしました。いくら病院に行っても治らず悪くなるばかりでした。その内戦争もだんだんはげしくなり丈夫な男の人達は召集されて行き、その度に私達も日の丸のハタをふりながら見送ったものでした。やがて私の夫にも赤紙が来ましたので召集先まで行きましたが返されて来ました。

其の内に終戦を迎える日が来ました。私達はラジオに流れる終戦の詔勅をききましたがいみがわかりませんでした。その日の午後から役場の人達が部落毎に廻って知らせてくれました。それで樺太はロシアに返すことになったので日本人は皆内地や北海道に行くことになったことで、そのことを知らされた私は目の先がぐらくなりました。病気の夫と子供四人連れでどこへ行けば良いのか迷いました。まして私は樺太生まれで一人っ子で親兄弟もなく何を頼りに何を目的に行けば良いのかわかりませんでした。

其の内二十一年春から部落毎に月何軒かずつ引き上げが始まりました。またそれと同じ様にロシア人も住民として入って来ました。

その内に私達の部落にもロシア人が各家に、部屋をしきりはいるようになりましたが、私の家は病人がおりましたのでロシア人は入れませんでした。戦争が終わると同時に食糧やすべてのものが不足になりましたので、私達の自給自足が始まりましたが樺太は寒いので米はとれませんので、いもとカボチャを作り少しばかりの配給で

生活しておりました。病人にもつらい思いをさせましたが、どうすることも出来ぬまま二十一年九月十三日に夫は亡くなりました。

なぜか私の心の中の不安がずばり当たったように思いました。子供達だけは無事に連れて行きたい気持ちで一ぱいになり、長男は十一歳になっていましたしみんなそかいすることになったので学校もなくなり仕事もなくなり皆それぞれの人は自分の食べる物を作ったり、そかいの仕度をしたりしていました。

私は仕事に出られませんので長男を頭に四人の子供をおいて真岡のバザールまでいろいろの品物を背負って売りに行き帰りにはそのお金を買った品物を背負って生活していました。子供達はロシアの子供達と仲良しになり女の子と男の子と二人姉弟で私の子供達と遊んでいました。お互いにロシア語で話し日本語をおしえて遊んでいる姿をみると人種は違ってもやはり仲良くしている子供達をみると日本人と変わりのないことを感じました。

もうその頃はあちこちで引き揚げて子供達もいないのでロシアの子供達も淋しかったのか毎日くるようにな

り、また私の子供達も行くようになりました。私は夏の内は毎日バザールに通いました。帰って来て子供の顔をみるとほっとします。冬はいもを食べたり引き揚げて行く人達から残り物をもらいやっと冬をしのいでいました。

私達も二十二年中には引き揚げなければならなくなりました。丁度真岡のバザールで一寸したことから知り合った人は北海道の初山別村字豊岬の人でした。私は其の人に来てもらい何か月か同棲しました。やはり引き揚げるときには荷物のことなどで収容所で男の人が必要だとのことを聞いていたのでいよいよ私達も二十二年の十一月二日自分の家を出発した。真岡の収容所に着きました。見晴らしの良い所で港は、目にみえました。毎日同じことをしてやっと昭和二十二年十一月十八日真岡港に引揚船が来てやっと徳寿丸に乗ることが出来ました。やはり行く先のない私には不安でしたが、一応身よりのない者として盛岡の兵舎の後に入りました。そこで冬を暮らして二十三年春といっても三月でしたが内地の方は秋まき小麦が青々としていて暖かったですが、北海道の

三月はまだ雪の中でした。同棲した人の家は豊岬でした。私は身よりのないので其の人の家に着いたときはやはり心配でした。弟夫婦と母親がいました。その家でしばらく世話になりました。

その内に同棲して来た人の態度が変わりすぐ子供をいじめるようになりました。その頃弟夫婦には子供がおりませんでしたので家族がめんどろをみてくれたので私の心も少しおちついて来ていた頃になって毎日のようにそれも一番小さい子二人をいじめるようになりました。後の二人は豊岬に来て学校に入れました。二人共一年おくれで学校に入れて頂きました。

小さい方の子供はすぐいじめられるのを見ると私は自分の身を切られる思いでした。一番小さい子は五歳になっていました。朝おきると自分の前にすわらせてどこが悪いそこが悪いと毎日たたくので、子供はいいいたいといつてなきました。私はすぐとめましたかとめればとめるほどたたくので、ただだまってみているしかありませんでした。弟夫婦や母にもずい分言われましたがききませんでした。しかたがなく豊岬で一年が立ちました

が子供のたたくのはやめませんでした。その内子供の左耳下がかたくなってたが出来て来ました。

私は思い切って弟夫婦に相談しました。それで別れることにしました。学校に上がった長男は受け持ちの先生の家で風呂屋をしておりましたので、そこで使って頂くことにしました。長女は農家に子守にかして三番目は小学校に入りましたので仕事に連れてあるくことは出来ませんので初山別の年より夫婦にくれました。五歳の子は私が連れて山の造材の御飯たきをしたり山が終わって春には鯀場の御飯たきと子連れであるいて鯀場の仕事は自分も樺太でして来たので良かったです。

その家は刺網でしたが石川県から五人か六人ぐらい来ていて朝御飯食べさせて沖に出すとすぐ船が着いて網を上げる仕度から御飯たきと二役しました。其の頃は年も若いし子供のことを考えながら夢中で働きました。そして鯀場が終わると今度は猿仏村の方へまた飯場の御飯たきに行きました。子連れで使って頂きました。そこはきりがかかって船がはいって来るので大変でした。そこで今度は私が体を悪くしてしまい途中で又豊岬に帰って

来ました。また同居した弟夫婦に相談して豊岬の民生委員の世話で旭川の唐沢病院に入院することになりました。子供は弟夫婦があづかってくれることになり同棲した人はもうそこにはいませんでした。

私は子供のことを頼んで旭川に行きました。病院の先生はろっ骨カリエスといっていました。手術してみたら胸骨カリエスで珍しいとのことでした。唐沢病院で入院して三か月で良くなりました。悪い所の骨をけづって中から肉が上がるまで三か月が立ちました。其の間五歳の子供を世話してくれた弟夫婦には感謝の気持ちで一ぱいでした。

退院して来ても其の頃は今のようになり母子家庭もなく自分の住む所はありません。十日ほど弟夫婦の所で世話になりその内寒くなって来たので弟夫婦が心配して私の住む家をつつけてくれました。そこは父と子供二人男ですが小学校に通っていました。その家の人のせんとくそうじをしてつくろいをするのでその家に世話になることになり、そこで二年ぐらいかな世話になりました。

その人は牛が一頭いて牛乳をしぼって生活をしていました。私は今の生活保護を受けていました。それでも一家族がいました。その家族は母子でしたが息子さんは大工をしていて冬の間は仕事がないので春まで冬ごもりの生活でした。それに満州から早く引き揚げて主人が早くなくなっていました。ですからひまのときはそのおばさんと話が合いました。ほっとした一時でした。

その内に春になり私も体の方も一冬休んだので良くなりまして隣の家の畠の草取りに頼まれまして秋まで使って頂きました。その内に今までおいてくれた人が私達をおきたくないとの話をききましたので、今の共成で再婚しました。大きい子供達は豊岬に残したまままた初山別にくれた子もそのまま初山別の学校へ通っていました。共成で再婚したのが二十六年十一月二十六日でした。話はきいて来ましたが年寄り二人子供が五人と今の夫八人の所私と子供一人連れて来たので十人の大家族でした。私が来たときは長男が中学二年でした。それからまた新しい生活が始まり心の中からはぜったい気のゆるすことの出来ない生活が始まりました。

其の頃は私も体が丈夫になり年も三十代でしたので朝早くおきてブタを飼い晩は仕事が終わってからブタのエサの仕度家の方には娘とばあさんもおりましたのでまかせて家に帰るのはいつも家の人が御飯が食べ終わってからでした。両親の世話、子供達の世話、それにブタの世話と今考えてみると良く一人でこれだけして来たなとつくづく思います。長男は私の来た頃は一寸ぐれたような子で自分で気に合わなかったら何でもものに当たる子供でした。娘の方は姉の方はおとなしいですがどこでどう気に合わないのか何日でもむっとしている娘でした。

なかなか一人一人の気持になやまされながらいつしか月日が流れて子供達も良くぐれないで育ち今ではそれぞれ子供の母親や父親になっています。今の私にたいしては子供達も理解しているようです。でもその頃の私はただ戦争をうらみました。戦争さえなかったら自分の子供も手ばなすこともなかったろうし、また子供達もばらばらにならずにすんだのではないかと思い、ただ戦争ばかりをうらみました。若いときはただがむしやに働いて来て再婚して相手の子供もぐれなくてすなおに育ってく

れたことが私の何よりの心のなぐさめになっておりました。

子供達がそれぞれ家庭を持ちまして二人きりになって今までは農業をして来ましたが時代とともに何時の間にか七十歳になってしまいましたので今は農業をやめました。今つくづく考えてみて背中 of 寒くなる思いが先にたちます。

これから先何年生きられますか。自分を大切にしてい日でも長生して生きたいと思っています。いちいちのことは略させて頂きまして、これをよんでみて皆様の御感想におまかせします。

引揚げて来て共成に來てからも四十年になろうとしています。とつてもつらいことがたくさんありますが、今は思い出しくありません。とても一生の思い出はらくしても苦勞しても心の中はいつまでもはれません。

樺太から、八人の子を育てて

宮城県 渡 会 トヨメ

私は大正六年十月、西海岸真岡郡蘭泊村に生まれ、何不自由なく育てられました。十九歳で結婚しました。それから、昭和二十年までに、男二人女三人の子どもができました。終戦になり、蘭泊村は、日本に先に引き揚げることになりました。十五歳以上の男たちは皆残され、女子どもは着たままで、あとの身のまわりの物は役場からチッキ小荷物の預かり証をもらい、大泊から送ってくれるとのことでした。七十歳になるお姑さんと三年生の子ども以下五人で終戦の翌日に出発させられました。私は生まれて初めての内地への旅立ちです。石炭を積む貨車で身を寄せ合って大泊まできました。そこには、連絡船を待つ大勢の人がいて、二昼夜も順番のくるのを待ちました。子どもたちは、疲れて倒れるし、ほんとうに生き地獄でした。お姑さんは当時七十歳、今から見れば年